

保育者養成における保育教材に関する授業研究 ～パネルシアターの製作・実演を通して～

溝口 綾子

Class study on childcare teaching materials
～ production and demonstration of panel theater ～

Ayako Mizoguchi

Summary

The making of environment that the childminder understands the expression of the infant and supports is important to bring up the expression of the infant richly. In addition, it is important for childminder oneself to show independence of will as a depictor. By this class "expression", I did the childcare teaching material in a panel theater and performed an on-site training I really produced it, and to demonstrate.

By this, the student was able to learn power of expression such as expression of molding it, musical expression, scene constitution expression, the expression by words with impression experience generally. I think that this will raise sensitivity and the expression nature necessary for the childminder as the depictor.

<キーワード> 保育者養成 パネルシアター 実践体験

1. はじめに

幼稚園教育要領¹⁾、保育所保育指針²⁾では、保育内容の領域「表現」のねらいについて「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と示されている。幼児期の教育の特色は「環境による教育」であり、保育者の願いや意図はこの環境に込められているのである。この環境とは、幼児を取り巻く全てを指し、幼児は身の回りにあるものを豊かに味わう経験を通して、幼児の表現の幅は広がっていくと考える。

この領域「表現」における幼児への保育者の役割は、幼児の表現を理解し支えていく環境づくりにある。また、保育者自身も表現者として主体性を発揮することが大切となる。このことは保育者の表現性と大いに関係すると考える。鈴木(2006)は、保育者が、一人ひとりの幼児の感性や表現を理解し受け止めようとするならば、まず、保育者自身の感性や表現が豊かに高められることが必要という。³⁾ そのためには、保育者自身の表現体験や表現技能を専門的に身につけることや、表現者として幼児のモデルとなったり、感動を与えたりすることが大切と考える。

本授業「表現」の目的は、幼児のありのままの表現や内心の欲求を理解するために、幼児は表現すること

によって何を経験するのか、幼児の表現を育てる保育とは何かを学習するものである。その一環にパネルシアターを保育教材として、実際に製作し実演するという体験学習を組み入れ、学生が保育者として自己表現する機会とし、学習の目的を達成させたいと考えた。パネルシアターを題材として選択した理由は、一つには、他の保育教材(ペープサート、エプロンシアター、人形劇、紙芝居、など)は保育実習や保育参加で実践体験があること、二つには、パネルシアターの製作、実演することによって感動体験のほか、造形表現、音楽表現、場面構成表現、言葉での表現など表現力の総合的な学びが、表現モデルとしての保育者に必要な感性や表現性を高めることにつながると考えたからである。

近年、パネルシアターなどの保育教材を造形的表現学習として授業に組み込んでいる養成校は多い。池田(2007)は、保育教材(紙芝居、パネルシアター)の製作を通して、学生は題材選択をどのように行っているか⁴⁾、また、棚橋、米谷、向平(2008)は、人形劇の活用において人形劇化された作品の比較によって、子どもに何を伝えようとしたか⁵⁾など、保育教材の題材に焦点を当てた研究は多い。また、滑川、中川(1975)著「児童文化」や、高橋(2008)著「児童文化と保育」など、児童文化財の一つとしてパネルシアターの意義や実技におけるやり方や楽しませ方な

どに言及した書籍は多数ある。本授業は、実践体験なので、このような題材そのものの研究や保育実技も学びの対象ではあるが、作って演じることを通して表現者としての保育者に必要な感性や表現力を高めるといふ授業の意図を達成したいと考えた。そこで、本研究は「表現」の実践的体験授業によって学生がパネルシアターの保育教材としての活用の意味や、実践を通して表現モデルとしての保育者についてどのように捉え実践しているか、保育者志向にどのような変容がみられるのか、授業を通してその実態を探り考察するものである。

2. 研究の目的

- (1) 保育内容「表現」の授業において「表現モデルとしての保育者」に必要な感性や表現性を高めるために、総合的な表現力を必要とするパネルシアターの製作、実演を体験することによって、パネルシアターの保育教材としての活用の意味をどのように捉えて実践し保育に活かそうとしているかを明らかにする。
- (2) 学生は、パネルシアターの体験学習の中で、幼児の表現を育てるために、どのような表現モデルとしての保育者意識の様態が見られるかを明らかにする。
- (3) パネルシアターの製作、実演という実践体験を通して保育者志向にどのような変容がみられるかを明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) こども教育専攻科学生44名について、保育内容「表現」の授業の意図を踏まえて「パネルシアター実践指導プログラム」を作成し、それに基づいて授業を行い、個人、グループワークでの体験学習の様態を捉えて解析する。
- (2) 授業後に実施する、学生44名の自己評価のレポートは、これらを「グループ活動実施の意味」「パネルシアターの魅力」「パネルシアターの手法」「自己発見・自己確認」を視点として分析、検討する。

4. パネルシアターの実践

(1) 保育者が支える表現

浜口(2007)は、「子どもは、豊かな感性の下地になるものは持って生まれるといわれているが、それを発揮させ、さらに育てるのは保育者の役割である。感性を育てることは、表現を育てることである。子どもの感性を育てるには、子どもの豊かな感性に気づきそれを受け止める保育者の『感性』もまた必要である」

と述べている。⁶⁾ この『感性』とはたとえば、園庭の隅に咲いている名もない草花であってもそれを美しいと感じ、コップにさりげなく挿す姿や、遠くで鳴いている小鳥のさえずりに耳を傾けたりする保育者の姿であり、その姿を目にすることこそが、子どもの感じる心や表現する心を育むことになると考えられる。保育者も日常保育の中で、歌ったり、踊ったり、楽器を鳴らしたり、絵を描いたりもする。その動機は、表現する楽しさを子どもに伝えるためであったり、楽しさを共感するためであったりする。また、保育者が表現するその行為は、子どもたちに大きな影響を及ぼす。子どもたちは生き生きと楽しそうに表現している保育者を目にすることにより、表現する楽しさを味わうのである。すなわち、子どもが心を動かす体験を多様に得られるようにしていく保育者の役割は極めて重要と考える。現在、保育現場におけるパネルシアターは、低年齢を対象に行う場合は保育者主導が多く、年齢が進むに伴って既成の作品や保育者の手作りの作品に子どもが参加して行っている。4～5歳になると子ども自身がお話を考えて製作し演じるようになる。保育者主導であっても演じている最中に保育者の問いかけに答えたり、セリフの一部と一緒に唱えたり、場面に絵人形の一部分を担当したりなど、取り組み方はさまざまである。このように子どもの発達や年齢により、保育の意図をもとに取り組みされている。

本授業で行ったパネルシアターは、物語を絵で表現し、それを使って保育者が話したり歌ったりしながら進めていく保育者主導の場合である。まさしく保育者の表現力が問われるものである。授業者としては、この体験学習を通して保育者志望の学生にパネルシアターに対する理解や活用の方法の学びとともに、保育者として「表現すること」における感性や表現性を養う機会となつてほしいと考える。

そこで、本授業の重点を「協働」「感動」「技能習得」「気づき・課題」とした。

(2) パネルシアター実践指導プログラム

<表1>は、こども教育専攻科44名の保育内容の指導法「表現」の授業での「パネルシアター実践指導プログラム」である。この実践指導プログラムは、パネルシアターを体験学習することによって、パネルシアターとはどのようなものなのかについて知るとともに、保育教材としての活用の意味や方法、表現モデルとしての保育者について理解し、より豊かな感性や表現力、実践力を高めようとするものである。

(3) 「パネルシアター」についての理解

パネルシアターの体験学習初日に、パネルシアター

とは何かについての講義を行った。講義に先立って、パネルシアターを知っているかどうかの聞き取り調査を行ったところ、「教育実習先の園で、すでに出来上がった作品を使って演じたことがある」あるいは「実習先の先生たちの実演を見た」という学生は少数

(44人中6人)で、ほとんどの学生は、全く知らないという状況であった。そこで、話を進めていく中で、まず、パネルシアターのミニセットで実物を示しながら解説をしていった。講義の内容については<表2>のとおりである。

<表1>「パネルシアター」実践指導プログラム

実施日	指導事項
6月23日 (月)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「パネルシアター」とは 講義<表2>参照 ・ パネルシアターの実物をミニセットで提示し、説明する。 ・ グループ(8~9人)を決めて、グループごとに題材である物語を選択する。<表3> ・ 役割分担(配役、舞台装置、ナレーター)を決める。 ・ 台本の読み合わせをする。 ・ 次回の製作に必要な用品や道具を確認する。(黒マジックペン、はさみ、カッター)(パネル用紙、絵の具は授業者が用意する)
6月30日 (月)	パネルシアターの製作 <ul style="list-style-type: none"> ・ 場面と登場人物(絵人形)を決める。 ・ 絵柄を考えて下書きし、黒マジックで線描きする。 ・ アクリル絵の具を塗る。 ・ 形を切り取る。
7月7日 (月)	練習をする <ul style="list-style-type: none"> ・ グループごとに絵人形をパネルに貼りながらせりふの練習をする。 ・ 歌や効果音などを考えて入れる。 発表をする <ul style="list-style-type: none"> ・ グループごと全員の前で実演する。 ・ 他のグループの実演を見る。 ・ 一人ひとりが体験に基づいて、感想を言う。 ・ 他のグループの感想を聞く。
7月14日	レポートの作成 テーマ:「パネルシアターの製作、実演で学んだこと」について、表現者として行うパネルシアターをグループで実際に製作、実演するという体験学習の結果から、「表現すること」について、わかったこと、意見、問題点、疑問点を記述する。

<表2>「パネルシアター」についての講義内容⁷⁾

<パネルシアターとは> 四角いパネル上に、絵人形を貼ったりはずしたりしながら、歌をうたったりお話を語ったりする。パネルはフランネルを貼ったボードで、そこに不織布に絵を描いて切り取った絵人形を付けていく。絵人形をパネルに貼ると、両方の繊維が絡んでくっつく。パネルシアターのミニセットで、パネルのボードや絵人形をモデル提示しながら行う。
<パネルシアターの特徴> ○ 作ったり演じたり手軽にできる・・・絵人形の材料である不織布は、ペーパー状なので絵が描きやすく切り取りも簡単である。演じ方、遊び方は絵人形を貼ったりはずしたりするだけなので、難しい。 ○ 演じ手と子どもたちはパネルを介して一体感を感じる。演じ手は子どもから見たパネルの右側に立ち、子どもたちの反応や表情を確かめながら演じることができる。子どもはパネルで演じられている内容や演じ手とを同時に見るため演じ手の人間性に触れながら、歌やお話の世界に入り込んでいく。
<パネルシアターの楽しさ> 子ども同士が一緒に見たり聞いたり、歌ったりする中で、演じ手も含めて様々な作品に触れて楽しさを共有することができる。その作品のもつ色彩や構成の面白さなどを楽しめ、いろいろな作品を通して創造性を豊かにする。
<楽しく演じるために> ○ 事前のポイント <ul style="list-style-type: none"> ・ パネルは子どもが見やすい高さに設定する。やや傾斜をつけて設定するとよい。 ・ 設置場所は光の当たり具合(逆光に注意する)を考えて、子どもが見やすい場所にする。

- ・ 絵人形を置く台をパネル裏に用意して絵人形を出す順番に並べておく。
- 演じ方のポイント
 - ・ 保育者は、パネルに向かって右側に立つ（絵人形の出し入れや操作がしやすい）
 - ・ 明るく表情豊かに演じるようにする。
 - ・ 作品によっては絵人形を出したりはズしたりするタイミングが違うので、繰り返し練習しておく。
 - ・ パネル上に出した絵人形は、意味あるときだけ動かす（やたらに触ったり、位置を変えると、子どもの注意がそがれる）
 - ・ できるだけ正面を向いて演じる。
 - ・ 歌やお話の中で、子どもたちに『これなーに』など問いかけの場面を作り、子どもたちを参加させると一段と盛り上がる。
 - ・ 一人ひとりの子どもの反応を見ながら演じる。

（４）グループ編成と物語の選択

＜表1＞の「パネルシアター実践指導プログラム」の初日にパネルシアターについての講義の後に名簿順にグループ編成を行った。そのグループ内で授業者が提示した5つの物語の台本を読みあい、製作したい物語を選択させた。それが＜表3＞である。

現在、保育現場においてパネルシアターの題材は、既存の物語（すでに紙芝居や絵本になっているもの）、保育者の創作話、園生活での出来事、手遊びや歌など多々ある。また、その取り組み方には自由感があり保育者同士の連携も見られる。すなわち、自由感があるということは、保育者の表現性にあふれているということであり、その上に保育者の連携が保たれているということ、子どもにとって楽しい時間を持っているということに他ならない。授業で取り上げた物語は、学生が教育実習先の園でよく目にしたという絵本や紙芝居の中から、台本として授業者が5つを抽出して提示したものである。このような既存の物語を提示した理由は、一つにはあえて学生が知っている物語の読み聞かせ本である「お話とその魅力」(相馬、都丸、星著、萌文書林)を台本とした。これは素話で文のみであるため、自分で絵や場面構成を考えることになる。二つには限られた授業時間の中で初めての体験なので、ある程度ストーリーが分かっている絵をイメージすることが必要であるからである。

＜表3＞の選択理由は、各グループから物語を選択決定した際に学生から聞き取り調査したものである。その選択理由は、それぞれの物語の特徴を捉えながら、それを見るであろう子どもたちに物語の面白さを伝えたいことなどが含まれている。これらは、子どもたちにパネルシアターを十分に楽しんでほしいという保育者としての願いであり意識の表れであると考えられる。

このような選択理由を明白にしてグループの一人ひとりが作業に取り組むことが、よい作品に仕上げるためには欠かせないことであると考えられる。

＜表3＞グループ編成と物語選択

班名	物語題名	選択理由
A 9人	三匹のこぶた	物を作る、壊すの繰り返し の面白さを楽しませたい
B 9人	ブレーメンの音楽隊	動物たちのにぎやかな 声を音響効果で出したい
C 9人	ジャックと豆の木	スリルと冒険の楽しさや、 ジャックへの親近感を持たせたい
D 9人	狼と七匹の子ヤギ	登場人物が多く、場面が にぎやかになり、楽しめる
E 8人	赤ずきん	狼が化ける不思議や、 未知の世界へ興味をつなぐ

5. 結果と考察

「パネルシアター実践指導プログラム」に基づいて授業を行った。最終週に提出されたレポートは、＜表1＞のプログラムの7月14日に設定されているテーマについて、自由記述したものである。そのレポートの内容について「グループ活動実施の意味」「パネルシアターの魅力」「パネルシアターの手法」「自己発見・自己確認」の四つの視点で検討したものが、＜表4＞である。

一つ目の「グループ活動実施の意味」については、全体の4割前後の学生がグループで協働して一つの作品を作り上げ発表した達成感を挙げている。反面、個々の絵描写はととてもよくできているが、絵人形の大きさのバランスや統一感に欠けていることを挙げ、仲間との連携の重要性を学んでいると考える。

二つ目の「パネルシアターの魅力」については、およそ半数の学生が絵本や紙芝居とは異なるよさとして

臨場感を挙げ、絵人形を示しながらせりふを言ったり歌ったりする演じることの楽しさを感じたという学生が4割であった。ここで留意したい事として、物語だけでなく歌や生活面の指導にも活用できるとした学生が少数(3%)いたことである。これは、おそらく以前の教育実習先での体験が基盤となっている意見と推察されるが、同時にパネルシアターの視覚教材としての効果に気づいているともいえる。

三つ目の「パネルシアターの手法」については、半数以上の学生が、役割や状況にあった声の出し方に注意することが大事としている。また、4割の学生が、文字で書かれているお話を子どもにわかるように描くことの難しさを挙げている。これらは、子どもを楽しませるために必要な表現の工夫であり、子どもたちが見ることを想定した表現者としての保育者意識の表れであると考えられる。

四つ目の「自己発見・自己確認」については、具体的事例の中には類似した内容であっても、学生個人によって微妙に異なる様態を示しているものもあった。たとえば、造形的な作業を苦手とする学生の中には、「他の人に比べ、自分は絵がうまくないので嫌だったが、授業なので仕方がない」といった否定的な姿に対し、「描くことが苦手なので、やる気がなかったが、実演になったら、せりふを言ったり絵人形を動かしたりして楽しくなった。次回には絵描くことも頑張ろうと思う」という自己発見といえる姿がみられた。一方、2割の学生が、教材選択から製作、実演の楽しさと難しさを実感しているが、およそ3割の学生は、実際に幼稚園で試したり、次の実習でやってみたい、さらに、子どもにどのように伝えていくかどのように反応するのか実演して確かめたいという課題意識を示している。

＜表4＞パネルシアターを学んでわかったこと 回答44名（複数回答可）

分析視点	具体的事例	頻度	%
グループ活動実施の 意味	・ グループのメンバー全員で協力することが大切とわかった	17	40
	・ グループで一つの作品を作り上げたという達成感を味わえた	16	37
	・ 全体像をつかんだり、どこにどのような絵にするか統一感を持たせたりなど、グループで工夫して取り組む必要がある	10	23
	・ メンバーの中には、初めてかかわりを持つ人もいたが、親しくなれてよかった	3	7
パネルシアターの魅 力	・ 絵人形の出し入れや効果音楽を入れるなど、臨場感が絵本や紙芝居と異なるよさである	21	48
	・ 絵人形を出したり、せりふを言ったりしてやるのが楽しい	15	34
	・ 物語選択は、内容の分かりやすいものがパネルシアターにあっている	11	25
	・ パネル全体の大きさにあった絵の大きさや色彩がきれい	2	5
	・ 物語だけでなく、歌や生活面の指導にも使える	1	3
パネルシアターの手 法	・ 役柄や状況に合った声の出し方に注意する	25	57
	・ 絵を出すタイミングと声を合わせるのが難しい	20	46
	・ 文字で書かれている物語を絵にするのは難しい	18	41
	・ 既成概念（ウサギは白、豚はページュなど）にとらわれず、イメージしたように描くと子どもは楽しめると思う	11	25
	・ 歌や効果音を入れると楽しさが倍増する	10	23
	・ 場面の転換とせりふの練習が大切である	9	21
	・ 子どもに背を向けないように絵を貼り替え、子どもが見ていることを意識する	3	7
	・ 他の人と比べて自分の絵は下手だが、授業なので仕方がない	1	3
自己発見・自己確認	・ 幼稚園で試したり、次の実習では自分で製作したりしてやってみたい	13	29
	・ 子どもにどのように伝えていくか、どのように反応するか、子どもの前で実演して確かめたい	10	23

<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分で絵を貼り替えたり、語ったりする手法を学びたい。 ・ 教材選択から製作、実演することの難しさと楽しさを知った ・ 自分が楽しんで行うことで、見ている人も楽しめる ・ 描くことは苦手なので、やる気はなかったが、実演になったら楽しくなった。次回からは描くことも頑張ろうと思う 	5	1 2
	1	3
	1	3
	1	3

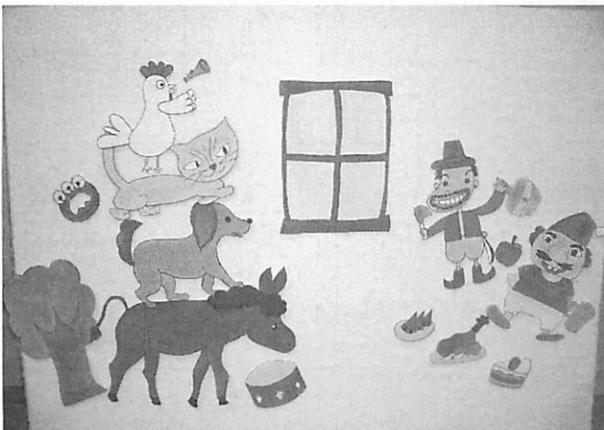
次に、学生のレポート「パネルシアターを学んでわかったこと」の具体的事例の中から代表例を提示し考察する。

＜事例1＞学生Wのレポートから

「パネルシアターをするとき大切なのは、みんなで協力することだと思った。絵を描いたり練習したり実際にやってみる中で、一人でも協力しない者がいると、良いものがないと思った。我々のグループは役割分担していたので、責任は果たしてはいるものの一人ひとりのやる気が十分でなかったように思う。「ジャックと豆の木」の班は、みんなで協力して絵を動かすときも、せりふを言うときも、とてもよい間が取れていて、見ていてすごいなと思った。・・・中略

発表は、まず自分が楽しむことで、見ている人も楽しめるのではないかと思った。恥ずかしがったりするのは見ている人にそれが伝わってしまうから、自分が積極的に楽しむことが大切だと思った。」

学生Wは、パネルシアターの製作から実演までのグループでの作業を通して、メンバーの協働がいかに大切であるかを実感している。すなわち、パネルシアターの絵人形や背景などの作ることに個人作業であるが、製作前の段階では文のみの物語からどのような絵人形、どのような場面にするか、だれが何をやるかというメンバーの協働が必要である。本授業では、実際の保育現場とは異なり、グループでの作業



＜写真1＞プレーメンの音楽隊の一場面

なので、実演の段階では絵人形を貼る人、セリフやナレーションを語る人と分担し連携が大切となる。このことについて学生Wは、保育の現場において保育者同士の連携や協働の姿勢など、園のチームとして動くことが求められているという重要性について、実体験を通して学んでいると考える。また、演じるときは演じ手がまず楽しむことが見ている子どもも楽しむことになると自己確認を図っている。

＜事例2＞学生Mのレポートから

「パネルシアターは、誰にでも簡単にできるものだと思っていた。しかし、実際にやってみると、言葉（ナレーション、せりふ）を言うタイミングや絵を動かすタイミング、動かし方など、意外に難しく大変だった。作る段階でも、どのシーンにどのようなキャラクターや物が必要になるかなどをすることも大変だった。実際、これは要るだろうと作っていたものが使われなかったり、通し読みをしているときに足りないものが出てきたりしたので、今後は創造力やよみとる力を付けるように経験を重ねることが大事だと思った。・・・中略

他の班を見ていて、自分が演じることばかりに気を取られてしまい、園児が見ていると想定して行っていることを忘れて、台本を見ながらパネルを動かしてしまったので、別の機会にするときにはもっと練習を重ね、余裕を持って自分自身も楽しんで行うことが大事だと思った。」

学生Mは、講義の段階ではパネルシアターはそれほど難しいものではないと思っていたようである。実際に体験してみて自分の創造力やよみとる力のなさを知ったと述べているが、真剣に取り組んでいるからこそ分かったことなのであろう。学生Mは、自分の保育技術（表現力）を高める方法と、子どもに楽しく見せる演じ方について学習の方向性を見出しているといえよう。

＜事例3＞学生Sのレポートから

「パネルシアターを演じてみてその難しさと楽しさを実感したが、他の班の発表を見ていて、見

る側としてもとても楽しさが伝わってきた。それは、紙芝居や絵本とは違った楽しさなのである。物語の進行に従って絵人形が出てきてせりふを言ったり歌ったりすることが動く場面のように、子どもたちによりリアルな印象を与えられると思う。・・・中略

パネルシアターは子どもたちをよりひきつける力を持つ視覚的教材だと思う。このような物語の他に歌の指導に使ったり、日常的に起こる喧嘩やトラブルなどの生活場面の出来事にも活用すると効果的だと思う。」

学生Sは、保育者として演じること以外に他の班の取り組みを子どもの側にたってみることによって、パネルシアターが他の視覚教材とは異なるよさや価値を見出している。そのことから題材を物語に限定するのではなく、歌などの表現活動や生活面の指導にまで、この教材の利点を生かした使い方を提案している。これらは、表現者に加えて保育者の立場からの気づきであると考えられる。

＜事例4＞学生Tのレポートから

「パネルシアターを製作から実演までしたのは初めてで、とても楽しくいい経験ができたと思う。ナレーションとせりふの間の取り方を工夫し、絵人形の貼り替えが上手にできるように考えて行った。本番では人数が少なかったため、練習のときより大変だったが、実際に園の子ども前でやるときは、保育者も一人か二人の場合もあると思うので、少人数でも流れが乱れないようにできる方法を見つけたい。・・・中略
みんなで一つの作品を仕上げることができてとてもよかったと思う。機会があればもっと練習して、めぐみ幼稚園の子どもたちに見てもらい、どんな反応を示すのか確かめたいと思う。」

学生Tは、パネルシアターの製作を始める直前に、実習先で既成の絵人形を使って演じた経験があると語っていたが、今回のような製作から実演まで全て行った経験は充実感溢れるものであったことが推察される。しかも、自分が保育者として演じることを想定した問題意識を挙げている。さらに、自分たちだけで発表しあうだけでなく、実際に幼稚園の子どもたちに見せたい、どんな反応を見せるか知りたい、という積極的な姿勢が感じられる。

本授業の受講生は、2年次までに幼稚園免許を取得し、保育者に必要な基礎的な力を習得した上で、3年次（専攻科）へ進級して保育士資格取得を目指してい



＜写真2＞三匹のこぶたの一場面

る。この3年次進級時の意識調査では、ほぼ全員が自己課題として子ども理解と実践力の獲得を挙げている。これらを踏まえて具体的事例を検討すると、代表事例にみられるように、協働すること、保育者自身も楽しむこと、保育技術を高めること、自分の気づきや確認したことなどを新たに認識している。これは、3年次進級時の意識調査ではほとんど見られなかった協調性や共感性、自己発見の姿であり、保育に真剣に取り組もうとする姿勢として評価したい。こうした実態は少なくとも保育者志向にプラスの方向に変容を示していると考えられる。

6. まとめ

学生は、「表現」の授業において、幼児期の子どもにとって表現する意味やその表現を支える保育者の役割について学んできた。本授業で講義の他にパネルシアターの製作、実演を組み入れたのは、これまでの講義での内容の裏づけや確かめとともに、座学の授業では得られない感動体験や技能習得になると考えたからである。すなわち、幼児期の「表現」を学ぶということは、保育者志望の学生も「表現する存在」でなければならぬと考える。

本授業でパネルシアターを保育教材として取り上げた理由については1の項で述べたとおりであるが、保育者志望の学生が最も望んでいた教材としてパネルシアターを取り上げたことにより、製作面では造形的表現力や場面構成力、実演面では言葉での表現力や音楽的表現力など総合的に直接体験したことである。何よりも多くの学生が製作、実演を通して感動を味わえたことは、授業者の意図した「保育者に必要な感性や表現性の習得」につながったのではないかと推察する。

このような保育教材の実際を組み入れた実践的体験学習は、「表現」そのものを理論で学ぶ他に、＜表4＞に示しているように視覚的保育教材の意味や効果、保育者としての「表現」を学ぶためにはこうした直接

体験は必要であり有効であることが明らかとなった。

また、この授業の過程で、個々の学生自身の中にあるイメージや考えを自由に外へ出そうとする姿が多く見られ、これこそ「表現」(expression)と捉えてよいと考える。つまり、保育者志望の多くの学生において個人差はあるとしても生得的な表現力や感性は備わっているといえそうである。しかしながら保育者としての表現力を高めるためには、実践体験結果で明らかかなようにやはり表現体験を多様に経験していくことは必要と考える。この保育者自身の表現体験を充実させることについて鈴木(2006)は、ある表現体験を身につけることや芸術や文化に触れ合うことも大切だがそれ以上に日常生活の何気ない事象や自然の移ろい、社会事象などに関心を持ち、感じ考える体験を繰り返し、自己表現を大切にすることが子どもの表現を豊かにする土壌となるという。⁸⁾ 授業者としては、日常保育において子どもたちへの好ましい援助をしていくために、保育者自身の表現性豊かで魅力あふれる人間性を目指してほしいと考える。

本授業におけるパネルシアターの保育教材の効果や活用の方法については、<表4>にあるように4割強の学生は、絵本や紙芝居とは異なるよさとして臨場感や、絵人形を用いてお話や歌を入れることの効果と実演する楽しさを挙げている。少数ではあるが物語以外の生活面への意識付けにパネルシアターの視覚的な効果が有効であることに気づいている学生もみられる。

また、約半数の学生は体験してみて初めて、パネルシアターの手法として製作技能や実演のための演技力の必要性を実感している中で、製作や実演を通してその楽しさや感動を体験した学生が4割となっている。これは、実演することの難しさが表現することの楽しさより優位を示している実態である。つまり、製作や実演を体験することで、喜びや感動を味わってはいるが、保育技術面の未熟さを痛感したということであろう。このような学生の自己評価は次の体験を導く動機づけとなりうると考える。また<表4>の具体的事例からは、4の(1)の項で述べているように、授業の意図としておさえた保育者に必要な感性や表現性を習得する上で重要と考えられる「協働体験」「感動体験」「保育実技習得」「自分の気づき・課題」のことがらを含んでいることが明らかとなった。これらは授業の指導の重点であるが、学生の自己評価との関連で分析するためには、これらの四つの重点を具体的な下位項目として示すことが必要であったと反省する。

授業者としては、保育技能力は経験を重ねていく中で培っていくとしても、何よりも学生が実践することの楽しさ、表現せずにはいられないという思いをまず実感してほしいと考えている。それが保育者の表現性

や感性につながると考えるからである。したがって今後、「表現モデルとしての保育者」を目指すためには今回の授業だけに止まらず、引き続いて実践体験する機会をもっていくことが必至であると考えられる。

今回の実践体験学習においてグループワークを行ったことは仲間と協働して取り組むことの重要性を知り、人とのコミュニケーション能力の必要性を認識することとなったと考える。さらに、少数ではあるが実際に子どもたちの前で演じることによって感動を共有したい、そのためには演じる側も楽しむ事が大事である、など、保育者としての願いや必要な資質に気づいた学生がいたことは、3年次(専攻科)進級時には見られなかった保育者志向の変容であると捉えている。実際には幼稚園側の事情と授業時間の調整が合わず、実践することはできなかったものの、一部の学生は本学のオープンキャンパスで実演することができた。今後はこうした学生の要望を実現できるよう、幼稚園側と連携をとりながら進めていきたいと考える。本授業は、15コマのうち、3コマを費やした。また、受講生が44名というやや多目の人数であったことは、この授業を効果的に進めていくための教材の量や活動する空間について検討していく必要がある。今後も引き続いて、本授業のような保育者養成に必要な実践的研究や課題を盛り込んだ授業方法を検討していきたい。

<引用文献>

- 1) 文部科学省(2008)『幼稚園教育要領』11
- 2) 厚生労働省(2008)『保育所保育指針』18
- 3) 榎沢良彦編著(2006)『保育内容・表現』同文書院159
- 4) 日本保育学会(2007)『日本保育学会発表大会論文集』184
- 5) 日本保育学会(2008)『日本保育学会発表大会論文集』227
- 6) 無藤隆・浜口順子(2008)『表現』萌文書林31
- 7) 久富陽子編著(2007)『保育実技』萌文書林118~119
- 8) 榎沢良彦編著(2006)『保育内容・表現』同文書院160

<参考文献>

- 相馬和子・岡本富郎・中田カヨ子・都丸つや子・星道子著(2003)『お話とその魅力』萌文書林
滑川道夫・中川正文著(1975)『児童文化』東京書籍
高橋司著(2008)『児童文化と保育』宮帯出版社
文部科学省(2008)『幼稚園教育要領解説』
厚生労働省(2008)『保育所保育指針解説書』